

雲仙岳災害記念館（がまだすドーム）の リニューアルについて

雲仙岳災害記念館館長 杉本伸一

1. リニューアルの経緯

平成2年から平成7年の5年間におよぶ雲仙普賢岳の噴火活動は、火砕流、土石流といった災害が人家の密集地帯に押し寄せてきたのが、大きな特徴である。この雲仙普賢岳の噴火災害においては、火山の脅威、災害に立ち向かった人々の姿、火山との共生、そして全国から寄せられた温かい支援など、様々な教訓が得られた。これらを風化させることなく後世へ伝えていく施設として、「雲仙岳災害記念館」は平成14年7月1日にオープンした。

雲仙岳災害記念館を運営する雲仙岳災害記念財団は、記念館の運営を通じて、雲仙普賢岳噴火災害の体験と教訓を伝承し、火山関係資源を活用した地域振興という役割を担っている。このようなことから、毎年6月3日の「祈りの灯」や、各種企画展、防災について学べる体験プログラムなど、様々な取り組みを行ってきた。しかし、開館当初年間38万人を数えた入館者も、平成26年度からは10万人を下回る厳しい状況が続いていた。

このような状況を打破するために、各種調査を行い、関係団体と検討を行った結果、展示施設の魅力向上や充実を図る必要があるとの結論に至り、平成30年にリニューアルに取り組み、4月1日にリニューアルオープンした。

2. リニューアルの内容

今回のリニューアルでは、展示造作を請け負った展示業者と当館を運営する財団、施設管理者である長崎県が、内容を協議しながら行った。展示内容については、雲仙普賢岳の噴火災害に留まらず、最近の火山や地震など、防災に役立つ情報も加え、将来の災害に役立てることができる内容を加えた。

また、展示手法についても、ドローン映像やプロジェクションマッピングなど最新技術を活用しながら、見せるだけのパネル展示ではなく、見て、触れて、感じられる体験的な展示を取り入れた。

なお今回のリニューアルの事業費は4億円で、その内訳は、展示工事費3億1千5百万円、建築工事費5千万円、設備工事費2千6百万円、その他費用が9百万円となっている。

以下に主なりリニューアルの内容について紹介する。

(1) 平成噴火ジオラママッピング

1990年（平成2年）に始まる一連の雲仙普賢岳の平成噴火を、既存の立体ジオラマへ映像投影する「プロジェクションマッピング手法」で分かりやすく紹介している。既存の展示では、ジオラマに赤い光を当てて、被害範囲を表示していたが、リニューアルでは噴火において火砕流や土石流が

日ごとにどのように流れたかを、空間的に把握できるようになった。当時の噴火記録が、詳しく残っているので、その資料をもとに火砕流の流れ方の特徴や、実際の被害範囲などを表示することができた。



写真1 平成ジオラママッピング

(2) 雲仙岳スカイウォーク

床面に映し出された直径4メートルの大型円形ビジョンは、空中散歩をしているような体験ができるコーナーである。雲仙普賢岳の噴火に関する場所を、上空から撮影したドローン映像を使って紹介している。特に、普段入城ができない平成新山の映像は、溶岩ドームの様子や立ち込める噴気に、火山の脅威と生きている地球を感じることができる。そのほかにも、登山道のない赤松谷では、土石流の発生源となっている沢などの貴重な映像が楽しめる。



写真2 雲仙岳スカイウォーク

(3) 災害までの経緯～その時何が

噴火の開始から43名の犠牲者が出た平成3年6月3日まで、災害の経緯を時系列の写真で追いながら、そこに住む人々や防災関係者などが、噴火活動をどのように受け止め、また感じていたかを紹介するコーナーである。自然現象は止められないが、火山に対する意識や避難をどのように考えていたかなど、将来の災害に備える上で体験が生かされる重要な展示コーナーである。当時の体験者から聞き取り調査を行い、その時々思いが伝わるように体験談を入れてある。



写真3 災害までの経緯

(4) 大噴火シアター

これまで記念館展示の中でも特にお客様から高い評価をいただいていたのが、「大噴火シアター」で、火砕流・土石流の体験映像が直径14メートルのドーム型スクリーンで再現される。今回、映像をフィルム上映から高精細デジタル映像（4K）に変更し、さらに新しい3つのコンテンツを加えリニューアルした。

従来の展示では、映像と連動して床が動き、吹き出す熱風とともに、災害を疑似体験することができた。今回、床の動きと熱風を取りやめることにより、安全上の入場制限で入れなかった小さな子どもも入場できるようになった。さらに、座席数を増やしたことで、多人数の修学旅行にも対応できるようになった。

また、既存映像のデジタル化とともに、「島原

半島のなりたち」、「その時何が」、「未来へ」の3種類の映像が新たに加わり、島原半島と火山との関わりや共存していく姿をより深く理解できるようになった。

「その時何が」は、災害当日の報道関係者や消防団、住民、タクシー運転手、警察官など犠牲にあった人たちが、どのように災害にあったのかを、当時生還した方々からの体験談をもとに再現したドラマである。

また、「未来へ」は、雲仙普賢岳の災害からの復興をイメージさせるもので、未曾有の災害を受け大きな被害を蒙りながらも、自分たちの愛するふるさとをもう一度再生させ、次の世代を担う子供たちへその思いを引き継ぐために懸命に努力する市民の姿を描いている。



写真4 平成大噴火シアター

(5) 火山科学コーナー

雲仙岳の噴火だけではなく、他の火山や防災についても学べるコーナーとして、火山科学のコーナーが新設された。内容は、「噴火の種類」や「日本の火山」、「世界の火山」、「火山クイズ」、「平成噴火映像アーカイブ」、「防災について」である。これらはタッチパネル式の映像展示で、火山科学に関することを様々な体験装置で学習することができる。



写真5 火山科学コーナー

(6) 火山の恵みコーナー

火山と人間の共生をテーマに、災害という負の側面だけではなく、火山の恵みというプラスの側面を紹介するコーナーである。火山は恐ろしい噴火や火砕流などで、私たちに多くの災害をもたらすが、同時に火山は温泉や湧水、郷土の文化や食など大地の恵みももたらしている。そのような大地の恵みについて映像アトラクション装置を使って紹介している。



写真6 火山の恵みコーナー

(7) その他

今回のリニューアルに際して新設されたものとして、ワンダーラボがある。科学や火山、ジオパーク、防災など様々なことについて、実験や体験プログラムを通じて、一人ひとりが幅広く学習する実験・ワークショップスペースである。さらに、島原半島ユネスコ世界ジオパークにちなんで、

地球の力や雲仙火山の魅力について、遊具を通して身体全体で楽しみ、感じ、学ぶ体験アトラクションゾーンとして「こどもジオパーク」が新設された。



写真7 保存整備された定点周辺

3. フィールドミュージアムとして

リニューアルを機に、島原半島ジオパーク推進協議会や島原半島観光連盟と連携し、災害遺構などを活用した事業にも取り組んでいる。

今回の噴火災害の被災地においては、多くの災害遺構が保存整備されている。土石流災害のすさ

まじさとその教訓を後世に継承し防災の重要性を伝える土石流被災家屋保存公園、噴火災害で傷ついた自然環境の復元を観察する平成新山ネイチャーセンター、火砕流で焼失した旧大野木場小学校被災校舎や砂防工事の監視所である大野木場砂防みらい館、多くの消防団が犠牲となった北上木場農業研修所跡などである。

フィールドミュージアムとしての考え方は、雲仙岳災害記念をコア・ミュージアムとして、ジオパークの見どころである平成新山の景色や火山災害の遺構、火山関係の施設や各種の防災施設などを、まるごと一つの野外博物館（フィールドミュージアム）としてとらえ、火山の驚異と自然の営みを学習するものである。

さらに、雲仙普賢岳噴火に伴う1991年6月3日の大火砕流で多くの尊い命が失なわれてから30年を機に、昨年6月、報道関係者が撮影拠点とし、多くの犠牲者が出た「定点」呼ばれる場所が、災害遺構として整備保存された。

災害遺構は整備することが目的ではなく、いかに活用するかであり、災害記念館としては、災害遺構を活用し、雲仙普賢岳の災害教訓を未来に活かしていきたいと考えている。